

いな ぎ さ そう
稲 城 砂 層

稲城市東長沼2111

☎042-378-2111

発行 2005. 1. 31



南山の崖に堆積する稲城砂層

稲城市役所から南側を見ると、京王相模原線とその背後に広がる南山の丘陵を見渡すことができます。この丘陵部は昭和40年代からのたび重なる砂利採掘じゃりさいくつによって大きな崖となっていますが、この崖の上から下までほとんどに見られるのが「稲城砂層」と呼ばれる砂の層いなぎさそうです。この崖で見られるだけでも約40mの厚さで横たわっています。稲城砂層は、稲城市域のほぼ全域にわたって分布していることから、稲城市域に見られる特徴的な地層といえます。

それでは、なぜ稲城市域にはこのような砂層があるのでしょうか。稲城砂層の生い立ちを探ってみましょう。この地層は、約100万年前に海の河口三角州かこうさんかくすのようなところで堆積した砂の層です。稲城砂層を含む上総層群かずさそうぐんという地層全体は、おおむね浅海域に堆積した地層であり、稲城砂層からも陸岸沿いの浅い所にすんでいた海の貝化石を見つけることができます。しかしこのような浅海域の海底であった場所も、砂の堆積によってしだいに干潟ひがたとなり、やがて海面上に顔を出すような環境になりました。稲城砂層の断面には浅い水域の潮流や波などの水の動きを受けた時にできる偽層そうりと呼ばれる斜めの層理が現われていることがありますが、これは約100万年前のこの付近が浜辺であったことを物語っています。また平尾地域の南部に泥質砂や泥層が見られるのはそこが沖合いだったためであり、市域北部の向陽台から長峰付近の高所には、陸成層である出店層でだなそうという礫層れきそうが堆積していることから、その当時は陸地であったことが判ります。陸地であった市域北部からしだいに高度を下げ、市役所南側付近で海岸線が作られ、平尾の南部地域は沖合いであったという、約100万年前の古地理を推定することができます。

約100万年以上も昔、陸と海の境界を一進一退していた稲城市域では、河口三角州のような環境で砂の層が徐々に堆積していき、稲城砂層と呼ばれる厚い砂層が形成されました。稲城砂層は厚いところでは100m余りにも達しています。この砂層の中には、火山灰層（凝灰岩層）が薄く挟まれていて、砂層の中に白い縞模様となって現われています。100万年も前に火山の活動があり、砂層の上に降り積もった火山灰が長い年月をかけて層となったものと思われます。南山の大きな崖や穴澤天神社北側の崖を観察すると、稲城砂層やこの火山灰層の白い帯を見ることができます。また稲城砂層の上の地表近くには関東ローム層（立川ローム・武蔵野ローム）が数メートルの厚さで堆積していることも判ります。

稲城砂層の砂は、比較的粒がそろっていて、粘土・泥などの含有が少ないのが特徴です。そのため土建用の材料に適していることから、昭和40年代からは都心部の地下鉄や上下水道工事の埋め戻し用材料として利用されてきました。特に昭和40年に多摩川流域の砂利採掘が全面禁止となってからは丘陵部の砂利が注目され、稲城の大丸・東長沼・坂浜などの丘陵部で山砂利の採掘が行なわれました。採掘は昭和43年頃から始まり、南山も徐々に削られ採掘後には大きな崖となって、私たちの目の前に現われることになりました。この大きな崖を観察すると、約100万年以上も昔の稲城市域の様子を垣間見ることができます。私たちの郷土稲城の歴史は、このような地層の上に成り立っているのです。

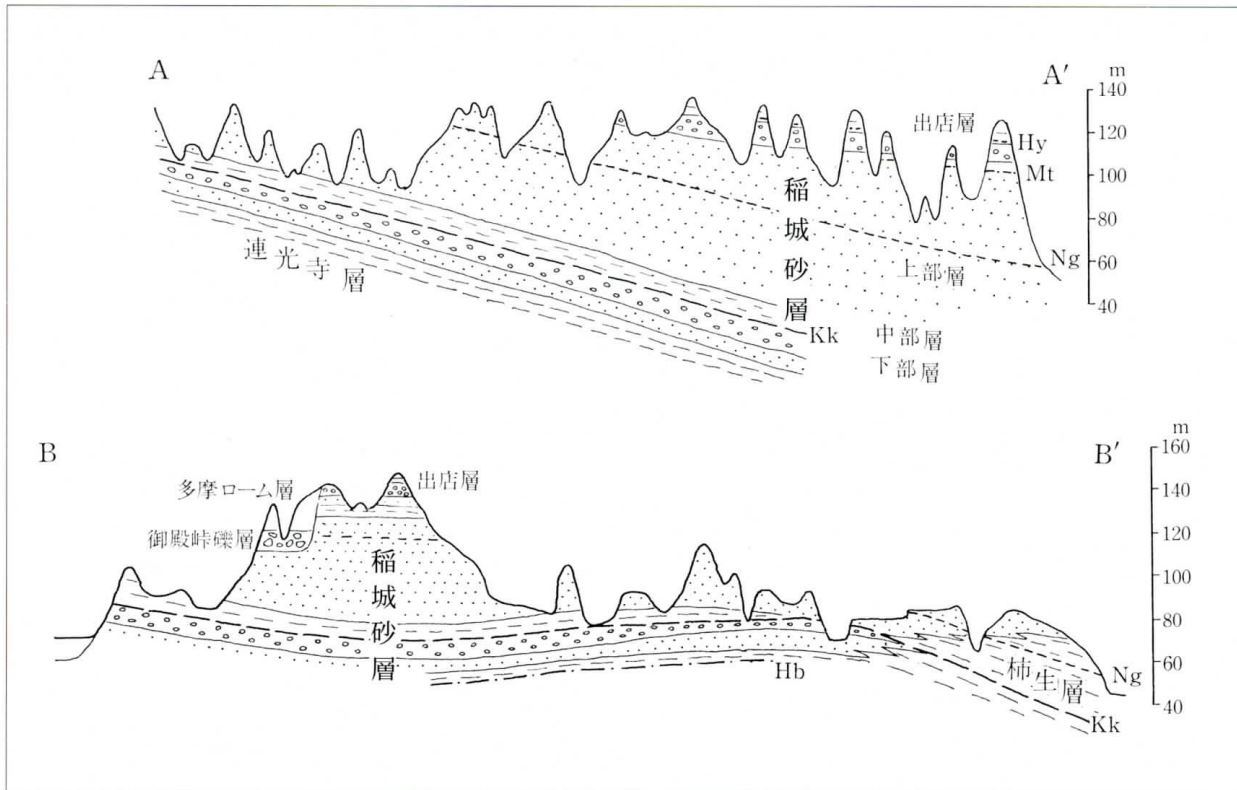
参考文献、『稲城市史上巻』（稲城市）、『稲城のあゆみ』（稲城市）



稲城砂層と火山灰層の帯（穴澤天神社北側）



多摩ニュータウン造成地の稲城砂層



稲城市の土層断面図（A-A'は若葉台駅北側から南多摩駅付近の断面、B-B'は永山駅東側から平尾地区東側の断面）